魔法少女リリカルなのはSts～漆黒の黒～

仮面の契約者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｓ～漆黒の黒～

【Ｎコード】
Ｎ９９８３Ｉ

【作者名】
仮面の契約者

【あらすじ】
機動六課解散の日まで残りわずかになった時
とある事件が起き始める…
運命に翻弄されて来た青年は少女達に何を見るのか…
少女達は青年に何を見せるのか…
今運命が動き出す……

第1章・動き出す運命（前書き）

初投稿作品です。

至らない点が有りすぎかと思いますが……ごめんなさい！！

漢字の変換間違いが多いかも知れませんが…ごめんなさい！！

第1章・動き出す運命

Ｊ．Ｓ事件が終結しミッドチルダの街から事件の傷跡が消え始め、機動六課の解散の日も近付いていたある日。

六課隊長陣の
高町なのは
フェイト・Ｔ・ハラオウン八神はやて
の三人は戦艦アースラの艦長でありフェイトの兄である
クロノハラオウンに話しがあるという事で、今時空管理局の本局に来ていた。

「本局に来るなんて久しぶりだね」

「そうやね、六課設立からずっとミッドだけで手一杯やったからね」

「うん、私もお兄ちゃんに会うの久しぶりかな」

と先程からこんなたわいも無い話しをしながらクロノの元に向かっているのだが。

なのは達が本局に今まで来れなかったのにはいくつか理由がある。

１つは休暇と言っても隊長陣は日々仕事が溜まるからである。

特になのはは戦技教導官である為、休暇日もＦ．Ｗ陣の訓練メニューを作成したりと大変だったのだ。

２つめは緊急事態の時に隊長陣がいなくては話しにならないからで

ある。

「でもいきなり話しって何なんだろうね」

「聞いた話しだと緊急なな話し見たい」

「「緊急……」」

フェイトの言葉になのはとはやてが同時にハモる。

三人に緊張が走る。

緊急で思う当たる事と言えば、、ロストロギア関連の事件の可能性が高い。

ロストロギア関連の事件は早急に片付けなくては取り返しのつかない事に成り兼ねないのだ。

「少し急ごうか……」

その言葉になのはとはやては頷き、三人はクロノの元へ急いだ。

作戦会議室前

今なのは達はクロノが待っている部屋の前にいる。

「「「失礼します」」」

三人は部屋の扉を開いた。

そこには椅子に腰を掛けて待っていたクロノがいた。

「やぁ久しぶりだね、三人共元気そうでなによりだ」

「クロノ君も久しぶり」

「久しぶりお兄ちゃん」

「久しぶりやねクロノ君」

「フェイト…流石にお互い良い歳なんだからお兄ちゃんは辞めないか？」

「別に平気だよ、お兄ちゃん」

「いや、だからだなぁ」

「お邪魔しちゃうんだけど、クロノ君話しって？」

このままでは永遠に続きかねないやり取りに見兼ねたのかなのはが本題をきりだす。

「あぁ、すまない話しがズレたね…とりあえず座ってくれたまえ」

それを聞くと三人は椅子に腰を掛ける。

それをクロノは確認すると、一度咳ばらいをし本題に入った。

「今回三人を呼んだ理由なんだが、とりあえずこれを見てくれ」
そう言うと、手元に現れたパネルを操作しモニターを出現させる。
「「「！！！っ」」」
モニターを見た三人は驚愕した。
そこには管理局の局員が三人それぞれ箱を抱えて運んでいた。
おそらくロストロギアだろう。
だが次の瞬間、局員の一人の首から上が消えたのだ…いや切り落とされたと言うほうが正しい。
それを見た残りの二人は即座にデバイスを構え周囲を警戒する。
しかし周りに誰もいない…なのは達が見ているモニターにも局員以外映らなかった。
その時局員の後ろから誰かが歩いて来る姿が映る…
それ姿は身長からなのは達と同い年ぐらいの青年だとは分かるが、
服装は黒いジャケットに黒いジーパンと黒ばかりで…
おまけには顔全体を隠す仮面を着けていた。
仮面のせいで表情は分からないが……
なのは達は何と無く感じた…
その少年が仮面の下で…
笑っていると……

次の瞬間

残っていた二人の局員の上半身が、少年の腕から出て来たワイヤーのような物に……引き裂かれた。

「「「ぅっ…！！」」」

三人は胃から込み上げて来る何かを抑えながらモニターを見る。

モニターに映るのは人間だった肉の固まりとロストロギアの入った箱だった。

「この後どうなったのかはカメラも破壊されて分からないんだ、でも既に今回ので5件目の事件になる」

「5件目っ！？」

「同一犯による犯行？」

「そうなんだ、どの事件も彼が関係している…」

「魔力ランクは？」

「現在ではまだ確定できないが、ＳＳぐらいあると想定している」

「「「ＳＳっ！！」」」

三人の表情が真剣な顔つきに変わる。

なんと言ってもＳＳランクである、管理局でも小数しか存在しないランクである。
更に追い打ちをかけるのがこのランクはあくまで想定である、下手すれば更に上かも知れないのだ。

こんな話しを聞けば誰だって真剣になる。

「それで、結局クロノ君は何が言いたいんや？」

はやてはクロノが言いたい事が分かっているにも関わらず、あえてクロノに問い掛ける。

それにクロノは心の中で　（はやて…人が悪いぞ）

とツッコミながら…

「この事件を機動六課に任せたいと思うんだが…　良いかね？危険な任務になってしまうが…」

そんなクロノの言葉になのは達三人は縦に頷く。

「すまないな、今回呼んだのはこれの為だ、期待しているよ」

その言葉を聞いた三人は席を立ち

部屋を出た。

この事件がこれからどうなるのかも知らずに……

今運命に翻弄されて来た少年と
運命に抗う少女達の

戦いが始まる。

第1章・動き出す運命（後書き）

とりあえず第1章どんな感じでしょうか？

初めてこういう物を書くので駄作ですが、感想等いただけると光栄です。

では次にまたお会いしましょう。

第2章・仮面の青年（前書き）

なんか展開が急です（汗）
文才がないんです（汗）
すみません。

一応これからも頑張って行きたいと思いますのでよろしくお願いします！

第2章・仮面の青年

砂漠……

一面に広がる砂漠を歩く一人の青年がいた。

その容姿は黒一色に統一されており、何より顔に仮面を付けており表情が分からなくなっていた。

この青年こそが先日局員を襲った仮面の青年だった。

「クリスタルダガー、次のロストロギア反応は？」

（はい、この付近に反応ありません。）

仮面の青年の言葉に右手にはめている指輪が答える。

これが青年のデバイス…クリスタルダガーの待機状態だ。

「先を越されたか……了解した」

（やはり続けるのですか？この計画を……）

クリスタルダガーはまるで何かを心配するかのように自分のマスターに問い掛ける。

「大丈夫だ心配するな、局員は大して強くない…契約者が出ない限り俺は負けない…」

（それでも気をつけて下さい、警戒しておくに越した事は無いですよ）

クリスタルダガーが自らのマスターに注意を呼びかける。

「分かってる、管理局も雑魚ばかりじゃない…」

（はい、例えば管理局のエース・オブ・エース…高町なのは、ですね？）

「負けは無いが苦戦する、対峙しないに越した事は無い…」

相変わらず自分は負けないと言い張るマスターに半分呆れながら…

（闇の契約者…黒の死神…黒（ヘイ）あなたも負ける時は負けますよ？）

と更に追い打ちをかける。

そんな自分のデバイスを、若干睨みながら…（仮面を付けてる為分からないが）歩き続ける、黒の契約者…黒（ヘイ）

彼こそがレアスキル契約を使いこなす指折りの契約者だ。

もっとも管理局はこのレアスキルの存在を知らないため、彼が契約者だと言う事も知らない。

「クリスタルダガーロストロギアの反応を探してくれ、転送魔法を使う」

（イエスマスター、サーチを開始します。……しばらくお待ちを…）

黒(ヘイ)はクリスタルダガーの返事を聞いてから歩くのを止め、その場にしゃがみ込もうとした瞬間……

（マスター！！余計な物がサーチにヒットしました。

）

クリスタルダガーの若干焦りが混ざった声が響く。

その声に何事かと思いながらも、休息の瞬間を奪われた事に苛立ちながらも即座にクリスタルダガーでは無いナイフを構える。

そして周囲を警戒し危険が無いと判断し、構えを解く。

「どうした？」

（すみません、サーチに局員らしき反応がヒットしました。おそらくこの距離だと向こうも気付いてるはずです。真っ直ぐ向かって来ます。）

「！！……わかった迎え撃つぞ」

自分のデバイスの珍しいミスに驚きながらも即座に判断を下す。

（私も起動しますか？）

「いや…問題無い、引き続きサーチを頼む」

（イエスマスター……）

そうこうしている内に管理局の航空魔導師隊が見えて来る。

その数２０

「っ……」

その数とおそらくまだ増えるであろう数に黒（ヘイ）は舌打ちをする。

次の瞬間…黒（ヘイ）の姿が消えた……

黒（ヘイ）が航空魔導師隊と交戦を始める少し前……

機動六課の作戦会議室に六課前線メンバーが集まっていた。

本局から戻って来たなのは達が他の前線メンバーにも状況を教え、これからの方針を決める為である。

「それじゃみんな集まった見たいやし、始めよか」

その言葉に全員頷く。

それを見たはやては更に話しを続ける。

「今回六課が担当する事件やけどここ最近ロストロギア回収中の局員が立て続けに襲撃されてる事件についてや、襲撃された局員はみんな殺されてるし、ロストロギアも奪取されてもうてる…とりあえ

ずみんなにはこれを見てほしい」

そうはやてが言うと全員の前にモニターが現れ先程なのは達が本局で見た映像が流れる。

案の定全員の顔が険しくなる。

ウ゛ィータやシグナムは…

「こりゃ…酷いな…」

「これは酷い……」

などとコメントし

フォワード陣はただ呆然とモニターを見つめている事しか出来なかった。

「こんな事が既に5件も起きとる、こんな事絶対に許したらあかん！しばらくこの犯人を追う事になると思う……みんなまた私に力を貸してくれるか？……」

今更こんな事を言うはやてにみんな……

「勿論です主が望みなら」

「あたりめーだはやての頼みでもあるし、それにこんなの許しておけねー！」

「今更水臭いよはやてちゃん」

「そうだよはやて」

「こんなの許しておけません」

等と賛同する。

「ありがとうみんな、それじゃあ事件解決頑張ろか！」

「「「はい！！」」」

「それじゃ今日はみんなオフシフトや、明日に備えてゆっくり休ん……

その時六課全体に出来れば聞きたくない音……

つまりアラームが鳴り響く。

「シャーリーどないしたんや！？」

「はい、八神部隊長先日事件が起きた付近を偵察中だった航空隊が目標を発見！交戦中見たいです！！」

「場所は！？」

「第６２管理外世界…惑星プトリオスです！」

「みんな今聞いた通りや、既に航空隊が交戦しとる、きっと辛い戦いになるかもしれんけどみんな頑張ろ…機動六課出動！！」

「「了解！！」」

はやての号令に全員返事を返すと、急いで転送ポートに向かった。

今なのは達は転送ポートに急いでいた。

軽く見積もってＳＳランクである、普通の魔導師では仇討ち出来ないレベルだからだ。

おそらく壊滅は時間の問題。

「私とティアナとキャロは後衛、フェイト隊長とウ゛ィータ副隊長、シグナム副隊長、スバルとエリオで前衛」

こんな時間も無駄にしないなのはは素早く全員のポジションを確認する。

「さっきは出動命令が出ちゃったから説明出来なかったけど、今回の相手は軽く見積もってＳＳランク…もしかしたらもっと上かも」

なのはの言葉に副隊長陣は予想通りと言った顔で、フォワード陣は絶句していた。

なのはとフェイトと同ランクと戦う事になるのだ、フォワード陣全員でやっと一撃当てられるレベルである絶句したくなる訳である。

「ＳＳランクてっ…なのはさんやフェイトさんと一緒ですよ！？」

スバルが驚きを混ぜた声でなのはに講義する。

それになのはは

「大丈夫だよみんな立派なＳｔｒｉｋｅなんだから」

「それになのはや私も、ウ゛ィータやシグナムもいる」

そんななのはやフェイトの言葉に少し安心したフォワード陣は「はい！」と返事を返すと再び前を向き走り続ける。

その顔に迷いは無くなのは達のよく知っている顔だった。

そして転送ポートに到着したなのは達は先に待っていたシャーリに黒（ヘイ）の待つ戦場に転送して貰うのだった。

「それじゃみんな頑張って行くよ！？」

「はい！（おう！）（うん）」

その場に静寂を残して。

第2章・仮面の青年（後書き）

相変わらず糞でしたね（笑）

すみません（汗）

次回も足りない文章力で頑張って行きます。

第3章・戦闘…目的…（前書き）

まず最初に……
すみませんでしたっ！！

年明け更新とかふざけてますよね……すみません

色々忙しくて（言い訳）
相変わらず文才ないし（涙）

これからも暖かい目で見てくれるとうれしいです。
ちょっとずつ上達して行くハズなんで（汗）

とりあえず（汗）３話です！！お楽しみあれー。

第3章・戦闘…目的…

……惑星プトリオス……

なのは達は転送ポートにより無事目標地点に到着できた。

…そこまではよかった…目の前に広がる惨劇が無ければ。

「な、何…これ」

「一体どうすればこんな事に！……」

目の前に広がる惨劇…今なのは達が居る場所は砂漠である。

本来なら一面一色で染まっているはず…しかし今は違う、周りを見れば…赤、赤、赤…つまり血である。

更に航空隊の隊員の残骸であろう肉塊が時折見つかる。

「こんな事、絶対許さない！！」

フェイトは手を握り全員が思っているであろう事を口にする。

「そうだね、こんな事する人ほっといちゃいけないよ！」

…なら止めて見るか？…

「「「！！！」」」

いきなりなのは達に念話で誰かが話しかけて来た。
なのは達は一斉に自らのデバイスを構える。
「誰だ！！」
……
そんなシグナムの叫びも虚しく返って来るのわ静寂だけ。
その時……
「後ろだ…後ろ」
「いつの間に！？」
全員後ろを向くとそこには仮面を付けた青年……黒（ヘイ）が立っていた。
（こんなに近くまで気付かなかったなんて！）
「お前達も管理局の奴らだな？」
なのは達が驚いている間にも黒はなのは達に問い掛ける。
「はい、時空管理局所属機動六課です、今すぐ武装を解いて投降して下さい！」
「機動六課？…投降はしない」
「何故です！？罪を認めれば多少刑を軽くできます！！投降して！」
なのはの呼び掛けに応じない黒にフェイトも投降を呼び掛ける。

「罪など感じない…感じられないしな」
そう言うと黒も自らの持つナイフを構え戦闘体制をとる。
「そんなぁっ！！」
「……」
「……仕方ないね…みんな行くよ！」
次の瞬間……
なのは達と黒が同時に跳ねた。
刹那……
黒がいきなりフェイトの目の前に現れる。
「……っ！」
「！！くっ！バルディッシュ！」
黒は無言でナイフをフェイトに振り上げる。
それをフェイトはバルディッシュをザンバーフォームに変えて防ぐ。
「テスタロッサ！！」

黒は声のした方を見ると、既にそこにはレバンティンを振り上げたシグナムがいた。
それを確認すると黒は瞬時に後ろに跳び後退する。
フェイトとシグナムも一度後退し距離をとる。

「シグナムありがとうございます」

「ああ…」

そう言って二人は再度構える。
そんな時二人になのはからの念話が繋がる。

（彼良い動きしてるから隙を見て包囲して一気に行くよ）

（わかった、なのは）
（了解した）

フェイトとシグナムは他のメンバーがそれぞれの位置に着くまで、時間稼ぎをする為に再度黒との距離を詰める。

「うぉぉぉ！」
フェイトはバルディッシュを大きく横から薙ぎ払う

「……」
黒はそれをバックステップでかわす。

「紫電一光！！」

「っ！？」

黒が着地した瞬間黒に燃剣が襲い掛かる。

黒は回避出来ないと判断

ナイフで防御する。

「！！」

自らの技をナイフで防ぐ黒に驚きながらレヴァンティンを握る手に更に力を込める。

「…それで本気か？…」

「そう言うか貴様のほうが押されているぞっ！」

レヴァンティンがカートリッジをロードするたびに炎が更に燃え盛る。

炎が燃え盛るたびに少しずつだが黒が押されて行く。

「私の勝ちだな」

「……」

「これで終わりだっ！」

シグナムに押され黒のナイフに亀裂が入り始めた。

既に包囲したなのは達はこれで決着が付くと思っていた……

しかし……

甘かった……

「……因果黒斬……」

黒がもつナイフから大量の闇が溢れだす。

「なに！？」

闇はレヴァンティンをも飲み込み始める

シグナムは咄嗟に黒から離れる為にバックステップをするが……

「なっ！いつの間に？」

脚にワイヤーが絡まっていて距離がはなせない。

「…逃げるのは無理だ…？」

「貴様っ！！」

「シグナムっ！！？」

フェイトが急いでシグナムの元へ向かう。

「来るなっ！テスタロッサ！」

「…黒の契約の元に…契約限定解除…」

「くっ！紫電一光！！」

最後の抵抗にシグナムは技を放つ……

「……黒斬破」

黒はナイフを振り下ろす。

そしてナイフが切った空間から黒の斬激が放たれ…黒の斬激とシグナムの放った技がぶつかり合う。

「シグナムっ！！」

「フェイトちゃん今は危ないよっ！行っちゃ駄目だよ！」

「そうです！今行ったらフェイトさんまで巻き込まれます！」

なのはとエリオは今にもシグナムの元に迎わんとしているフェイトを止める。

なんせ周りに来る衝撃が凄いのだ、立ってるだけで精一杯だ。

それ故になのは達も手が出せないのである。

その間にも二つの斬激はお互い激しくぶつかり合う……だがそれも終わる。

「粘るな…だが」

そう言うと黒はなのは達に顔を向ける。
なのは達が手だし出来ない状態なのを確認すると再びシグナムを見る。
「…」
そして
「……」
黒は再度ナイフを振り上げ。
「リミッターＥＸ解除」
叫ぶと同時にナイフを再度振り下ろす。
すると、先程黒が切り斬激が放たれた空間が……
歪んだ……
瞬間先程と比べ物にならない大きさの斬激がシグナムに放たれた。
「なっ！！うぉぉぉ」
シグナムが放った技は即座に黒の斬激に飲み込まれ……
シグナムはそのまま斬激を浴びて……
宙に投げ飛ばされた……

「シグナム！」
「「シグナムさん！」」
即座にライトニング隊の面々がシグナムの元に向かう。
「シグナム！目を開けて下さい！」
「「シグナム副隊長！」」
フェイトがシグナムを抱き抱えその周りにエリオ、キャロが集まる。
シグナムは斬られた所から大量の血が流れておりどう見ても早く治療しなければいけなかった。
「フェイトちゃん……」
「「フェイトさん…」」
なのは達はそんなフェイトを見て何かを決意したように頷く。
「ウ゛ィータちゃん、スバル、ティアナ、私達で彼を止めるよ！！」
なのはのその言葉を予想していたかのように三人は無言で頷くと
なのは達はフェイト達の前に立つ。
「なのは？」

「フェイトちゃん達はシグナムさんを医務室に連れて行って」
「そんな…私も戦うよ！」
「駄目だよ！早くシグナムさんを連れて行かないと！」
一緒に戦うと言うフェイトになのはは若干強い口調でフェイトにシグナムを連れて行くように言う。
「なのは……」
「私達なら大丈夫だから…ね？フェイトちゃん」
「……わかったよなのはだけど無理しないでね？」
「うん私は大丈夫だよ？ウ゛ィータちゃんやスバルにティアナもいるから」
「そっか…ウ゛ィータ、スバル、ティアナ、なのはをよろしくね？」
「おう！任しとけ、だからシグナムを頼んだ」
「「任せて下さい！」」
三人の言葉にフェイトは微笑んだ。
「それじゃあ行って来ます」
そうしてフェイト達は転送魔法で六課に向かった。

こうしてその場に残ったのは黒となのは、ウ゛ィータ、スバル、ティアナとなった。
なのは達は黒に向き直りしばらく静寂がその場を支配する。
そんな時今まで黙ってなのは達のやり取りを見ていた黒が口を開く。
「まだ邪魔するか……」
「うん、私達は君を止めて早くフェイトちゃん達の所に戻る」
なのはは黒の問い掛けにきっちりと返事をし尚もその瞳は黒を見つめている。
「そうか」

「だがこれ以上邪魔するなら…」
「私達を殺すの？」
「……」
黒は何故かその問いに答える事が出来なかった。
その間にもなのはは未だ意思のこもった目で黒を見つめる。
「！！」

それを見た黒の中でなのはとある人物が重なる。

それと同時に一瞬考えてしまった。

この目の前にいる奴は何故力を手にしたのか…

自ら望んだ力なのか手に入れてしまった力なのか。

「わかった目的を教える……ただお前が何故魔導士になったのかを教えて欲しい…」

「えっ！？」

まったく予想していなかった返事に拍子抜けした声をなのはが上げる。

後ろにいるウ゛ィータ達も呆気に取られた顔をしている

いきなり魔導士になった理由なんて普通聞かれないだろう。

しかも対峙している敵と言う存在に聞かれるなんて尚更だ。

「やだか？だったら……

「良いよっ！！教えてあげるから君も教えてね？」

なのはが黒の言葉を遮る。

こんなチャンスを逃す訳にはいかなかった。

そんな返事に黒は

「…」

と無言で頷く。

なのはの話しを聞く為に…自らを語る為に……

第3章・戦闘…目的…（後書き）

どうでしたか？
相変わらず糞ですが（汗）
これからも頑張って行くのでよろしくお願いします！

「予告」
ついに仮面を外し素顔を見せる黒……
なのは達は一体その瞳に何を見る……

次回…魔法少女リリカルなのはｓｔｓ～漆黒の闇～
第４話・悲しい瞳と想う気持ち

「魔法少女リリカルなのはｓｔｓ～漆黒の闇～にテイク・オフ」

第４章・悲しい瞳と想う気持ち（前書き）

はい、今回は早く話しを投稿できました（笑）

出来は糞ですが楽しんでくれたら光栄です（汗）

第４章・悲しい瞳と想う気持ち

「始まります」

第4章・悲しい瞳と想う気持ち

「……聞かせてくれ…お前が魔導士になった訳を」

黒は珍しく自分の私情の含まれた質問をした事に後悔しながらも、なのはに語るように言う。

「うん良いよ」

そして少し間を開けてからなのはは語り出す…

自らを。そう言うとなのはは間を置いてから語りだした。

「私の魔法との出会いは……

なのはの魔法との出会い…それはユーノ・スクライアを助けた事から始まった……

当時のなのはは普通の小学3年生、本来ならそれからも普通に育ち魔法なんか知らずに育っただろう。

しかしその時になのはの運命は変わって行った。

なのは森の中で倒れていたユーノを助け、ジュエルシードの存在、魔法を知り……自らのデバイスレイジング・ハートに出会い…

当時プレシア・テスタロッサの為にジュエルシードを集めていたフェイト・テスタロッサに出会い、敵対し…何度もお互いぶつかり合い、傷ついた。

なのはは何度もフェイトに叫び続けた…なんでお互い戦わなくては

ならないのか…何度も何度も叫び続けた。

そしてお互いのジュエルシードを全て賭けた海上での全力全開対決。

そこて勝利したなのはは改めてフェイトに……

「友達になりたいの」

と宣言…その言葉に心を打たれたフェイト…だがそれで終わりじゃなかった。

フェイトの裏切りにプレシアが怒り現在所持していたジュエルシードで大規模な次元震を引き起こそうとした。

そこでプレシアの本拠地になのは達で突撃……フェイトと最後までフェイトの手を取らなかったプレシアの悲しい別れで幕を閉じた。

後にP・C事件と呼ばれる。

しかしまだなのはの物語り終わりはなかった。

闇の書事件……

なのは達と八神はやて…ウ〝ォルケンリッターの面々との出会いの物語…

当時足が不自由だった八神はやては闇の書の主だった。

普通ならそれを悪用する物が多いがはやてはウ〝ォルケンリッター達を闇の書のプログラムとしてでは無く、家族として接し共に時を過ごした。

しかし…はやての足が闇の書が原因で悪化の一途をたどっている事を知ったウ〝ォルケンリッターは、闇の書を完成させはやてを病魔

から護る事を考えた。

それで幾度となのは達と戦う事になった。

とうとう闇の書を完成させたウ〝ォルケンリッターだったが予想外の暴走によりリーンフォースが誕生し、最後悲しい別れを告げる事になった。

闇の書事件……

そして最近起こったゆりかご事件……

はやてが達上げた機動六課、主にロストロギア回収を目的とする部隊。

なのは達を始めとする隊長、副隊長……

新人部隊のＦＷ陣。

日々の訓練によって力を付けて行くＦＷ陣……そしてついに……

聖王のゆりかごが動き出す。

各地で戦う六課メンバー達…

過酷な戦いは時空管理局の勝利で終わった。

Ｊ・Ｓ事件

……色々な事、悲しい事が沢山あったけど、それに負けずに自分が皆を守れるようになりたいから……私はここに魔導士としています」

なのはは黒に全てを話した。

自分の始まりから今に至るまで…

それを全て聞いた黒は一回頷くと……

「そうか…」

とだけ答えた。

「それじゃあ君の事も聞かせてくれるかな?」

「……良いだろう」

そう言うと黒もなのはと同じく語りだす。

東京に突如あらわれた門……通称ヘルズゲート。

ヘルズゲートの出現と共に東京から本当の空は消えた、いや偽物に覆い隠されたのだ。

更に契約者と呼ばれる異能の力を持つ人間が現れた。

そりて偽りの空に輝く星達は契約の星…

契約者が死ねば星も流れ落ちる

そうしてそのような物を作りだしたヘルズゲートを覆い隠すため政府は東京に巨大な壁を作った。

……という訳だ」

「東京って君も地球出身なの！？」

黒から告げられた事に驚きながらも聞くなのは。

「そういう事だ…ただお前のと違うパラレルワールドの地球だがな……」

「パラレルワールド？」

聞いた事ない言葉になのはと後ろにいるウ゛ィータ達も頭を傾げる。

「簡単に言えば並行世界だ…例えば今俺はお前達と対峙しているが、別の並行世界には対峙してない世界もあるし、会ってすらない世界もある」

「成る程な、お前はそこから来たって言いたいのか？」

ウ゛ィータが黒に問い掛ける。

「そうだ、…その時俺はヘルズゲートの中に居たはずだったが光りに包まれたらいきなり…」

「契約者は？」

「契約者は突如現れた異能の力の持ち主だ……」
「君も契約者なの？」
「そうだ……だから俺は人を殺せる…」
そう言うと一瞬悲しい表情をするがすぐに元の表情にもどす。
「なんで？…なんで契約者なら人を殺せるの！？」
なのはが必死に黒に呼びかける。
だが次に返って来た言葉に絶望する。
「……契約者には感情が無い…」
「「「……えっ……」
」」
こんな返事を誰が予測しただろうか……
感情が無い……
だから人を殺せる……
「そんな……」
「嘘じゃない…真実だ」
あまりの言葉に驚愕するなのは達……
いや驚きより

むしろ悲しみのほうが今の感情の大半を占めているだろう。

感情が無いとはつまり…

喜び、幸せ、怒り、悲しみ……

どれも感じ無い…心が無と言う事だ。

それは普通の人間だったらありえないし

何より辛いだろう。

「…そんな…酷過ぎるよ…」

なのははあまりの事実に涙を流す。

「何を泣いている？」

そんななのはを見て本当に何も分からないのか表情一つ変えずに聞いて来る

「なんで平然としてられるの？…皆が感じる事が感じられないで悲しくないの！？」

「……何も感じない」

「……」

しばらくの沈黙、聞こえるのはなのはの泣き声のみ。

そして……

黒が突然なのは達に背を向けて歩きだす。

「何処……行くの？」

「……」

なのはの言葉に返事すらせずに歩き続ける黒。

「何処にっ！……

「此処に居る理由が無い」

なのはを無視する黒に、ウ゛ィータが同じく引き止めるが、黒が言葉を遮る。

振り向いた黒の瞳にはやはり感情が篭ってなく、

無情にも瞳はウ゛ィータをひたすら睨み続ける。

ウ゛ィータが何と言うか考えていた時……

なのは達の後ろに突如魔法陣が現れる。

次の瞬間……

魔法陣の上にさっきシグナムを連れて戻ったフェイト達がいた。

「!?なのはっ!」

「フェイト…ちゃん」

泣いているなのはを見つけるや直ぐにフェイトはなのはに寄り添い、黒を睨みつける。

「なのはに何をしたんですか?」

「別に何もやっていない……真実を告げたまでだ」

黒はフェイトの問いに答えると、再び仮面を顔に付けて歩きだす。

「まって!」

「なのは!?」

「……」

突然のなのはの叫びに驚き、なのはと共に黒を見つめる。

「一緒に…来てはくれないの?……」

「ああ……」

黒は答えると目の前に自らの黒い魔法陣を展開する。

(転送魔法!!)

「待って!!」

黒はそんななのはの叫びを残して……

転送魔法を発動……

砂漠から姿を消した…（逃げた？…なんで？っ！そんな事より）

「なのは！どうしたの？何かやられたの？」

「ううん、違うよ…大丈夫」

なのははやっと自分で立ち上がり、黒が消えた場所を見つめている。

（ウ゛ィータ、スバル、ティアナ…何があったの？）

（いや色々な、六課に戻ってから話す）

（なのはさんにはショックがでかかったらしくて……）

（私達も悲しかったですし……）

フェイトは念話でウ゛ィータ達に問い掛け、返事を聞いてから。

（わかった。それとシグナムは傷が深くなくて大丈夫だったよ。）

と返して念話を切る。

その報告にウ゛ィータ達は安堵し、なのはを見つめる。

こうして黒と六課メンバーの１ｓｔコンタクトは終わりを告げた。

悲しみをそれぞれの心に残して。

第４章・悲しい瞳と想う気持ち（後書き）

どうだったでしょうか？

相変わらずだと思う人とよかったと思う人が居てくれると思いますが……

自分的にはまだまだ糞です（汗）

皆さんと力の差がありすぎて悲しいです（涙）

【予告】

「仮面の彼から告げられた真実」

「感情がないって言葉には何処悲しみを感じて」

「与えられた六課の休暇」

「暗闇の中に死に神は何を見るのか」

「魔法少女リリカルなのは～漆黒の黒～

第５話・李瞬生

「魔法少女リリカルなのは～漆黒の闇～にテイクオフ」

第5章・李瞬生（前書き）

暫く更新出来なくてスイマセンでした（汗）

携帯が最近まで親に止められると言う悲劇に襲われまして……

これからまた少しずつ更新して行きます！

後、みなさんからの感想等を取り入れ今までの話しを編集したため、読者のみなさんには第2章辺りから再び読んでいただきたいです（汗）

少しはマシになったと思います……

以上作者からの言い訳&お知らせでした。

第5章・李瞬生

明かりのついていない暗闇の部屋。

あれから黒はなのは達の前から姿を消し一度自らの隠れ家に帰宅していた。

「……」

ただ窓辺に座り太陽が沈みかけている夕空をただ見つめる。

そして何故自分があんな事を問いかけ喋ったのか考え続けていた。

部屋を支配するのは沈黙

そんな中部屋に通信端末の独特な呼び出し音が鳴り響く。

【マスター通信端末より呼び出しです】

黒は律儀に答える自分のデバイスを横目で見ながら通信端末を手に取り耳に当てる。

通信端末から聞こえて来たのは男の声

【黒調子はどうだ?】

「特に問題は無い…」

【どうした? 何かあったか?】

最後に黙り込んだ黒を疑問に思い問い掛ける男。

それに黒は今日対峙した敵をばつが悪そうに話し始める。

「今日管理局の機動六課とか言う部隊と交戦した……」

【お前…機動六課ってあのＪＳ事件を解決した英雄の部隊だぞ！？】

「そうなのか？」

【ああ、管理局エースオブエースの高町なのはが所属する部隊だ！」

「っ！……」

その言葉を聞いて黒の中で全てのつじつまが合った。

「それが本当なら今日その高町なのはと戦ったぞ」

【！っそうか……感づかれたか？】

黒の言葉を聞き男はいきなり冷静になり、一番重要な事を聞く。

「それは無い…」

【なら良いがな…気をつけろ、もし感づかれたらお前が元の世界に戻る事も俺達組織の計画もおしまいだ…それで首が飛ぶのはお前だって事忘れるなよ？】

「……」

黒はその言葉に返事を返す事はしなかったが、男はそれが黒と言う男だと知っているのか、特別気にせず話しを進める。

【まぁお前がそんなヘマするなんて無いだろうがな…】

「……話しはそれだけか？」

【全く連れない奴だな…まぁ良い引き続き頼むぞ黒の死神さん】

男がそう言うと通信端末から何も音がしなくなる。

それを確認した黒は、通信端末を近くのテーブルに置き、窓辺へと進む。

そうして目の前に広がる街を見渡しながら呟く。

「白（バィ）…俺は一体…」

死神は呟く自らの妹の名を…自らが死神になる前に死神になって消えて行った妹の名を。

そして死神は目の前に広がる街で一番目立つ建物を見据え…不意に呟く

「時空管理局地上本部…」

そう死神の前に広がる街こそミッドチルダ…

組織が死神に用意したミッドチルダのマンションの一部屋……
死神はミッドチルダに誰にも知られず降り立っていた。
しばらく目の前に広がるミッドチルダの街を見ていた黒は、窓辺を離れベットへ向かう。

「クリスタルダガー現在の時刻は？」

【ただ今17時22分になります】

「19時に起こしてくれ…街に出る…」

【了解ですマスター】

黒は自分の愛機に用件を伝えベットで眠りに就いた。

死神の見る夢はいつも黒より暗い暗闇だ……

故にまた死神は休めない…

いつまでも…いつまでも

その頃……

大理石の廊下を歩く謎の男…
男はある扉の前で立ち止まり一回咳ばらいをしてから扉を2回ノックし、

「総帥入ります」

声を掛けると扉の中から

「よい…入れ…」

と返って来た。

返事を聞いた男は静かに扉を開け部屋えと入る。

部屋に入ると椅子に腰を掛けている男が居た。

年齢は２０～２５ぐらいだろうか…

整った顔立ちに金髪の男が……

その総帥と呼ばれた男を見るなり入って来た男は一礼し何かの報告をし始める。

「本日ミッドに先行させている黒の死神が管理局の機動六課と交戦及びエースオブエース高町なのはと交戦した模様」

「……そうか黒がな…奴は無事か？」

「はい」

「そうか…まだ奴には利用価値があるからな…いやまさか次元漂流者を拾ってやったら当たりくじだったとはな…つくづく運が良い」

男は微笑みながら窓辺から外を見る。

そこには次元空間が広がっていた……。

その景色はこれから起きる事を表すかのような漆黒だった。

時刻１８時００分
あれからなのは達は後から到着した部活に事件の後処理を任せ機動六課に帰還し、再びブリーフィング室に集まっていた。
「みんな集まったな？ほんならなのはちゃん報告頼めるか？」
「うん…わかった」
そう言うとなのはは今回あった事を語りだす。
いきなり自分が魔導士になった理由を聞かれた事。
それと引き換えに仮面の青年が次元漂流者だと言う事を教えてくれた事。
彼の世界には契約者と言う異能の持ち主がいて、彼等には感情が無い事。
何より…それらを語る彼がどこか悲しかった事。
「フェイトちゃん達がいない間の事はこれで全部」
そう言ったなのはの言葉を聞いてはやてが頷く。
「そうか、ありがとななのはちゃん…辛かったやろ」
なのはは家庭の事情で幼い頃はよく一人で過ごす事が多かった、その為悲しみや苦しみに過剰に反応し、感じ取ってしまうのだ。

「大丈夫だよはやてちゃん、そう言う人を助けてあげる為に私の力があるんだもん」

そう言って笑顔を見せるなのは。

それに安心したのかフェイト達が安堵の表情を浮かべる。

「そんならなのはちゃんは大丈夫やね」

「うん、それでねはやてちゃん…彼とは多分ちゃんと話しが出来ると思うの」

「ああ、あたしが止まれって言った時も一度止まったからな、話しは出来ると思う」

「ほんなら余り無駄に戦わなくて平気そうやな」

なのはとウ゛ィータの話しを聞いてはやても納得する。

戦かわなくて平気と言う事に関してははやても嬉しかったりする。

誰だって戦わずに事が済むなら嬉しい物である。

一部バトルマニアは分からないが……

「なら次は彼の実力なをやけど」

その時不意にブリーフィング室の扉が開かれる。

「主、遅れてしまい申し訳ありません」

それは負傷して安静中のはずなシグナムだった。

「シグナム！？」

「「シグナムさん！」」

フェイトとエリオ、キャロがシグナムの元に向かう。

「大丈夫なんですかシグナム？」

「ああ、そこまで傷も深くなかったしな…それにあれは手加減をしたのだろう」

シグナムの放った手加減と言う言葉に室内の空気が重くなる。

それもそうだあんな大量の魔力を放出してあれで手加減なのだ、それにシグナムを倒した塹撃……直撃だったはずなのだ少なくともなのは達にはそう見えた。

だがシグナムの傷を見たら傷は直撃コースを外していた。

つまり当たる直前にコースを反らしたのだ……

そんな事が並大抵の者に出来る訳なかった。

「あの男はかなりの強者です」

「シグナムの話し聞く限りそうやろね……」

はやても厳しい表情をする。

いとも簡単にシグナムを倒す相手……

出来れば敵に回したくない

これが今のはやての考えだった。

「まぁとりあえず、今後事件に進展があるかもやし今日と明日はみんなオフシフトや」

「「えっ」」

はやてのいきなりの休暇宣言に部屋に居た全員がハモった。

「そんな良いのはやてちゃん！？」

「そうだよはやて！？」

「そうです主！」

「そうだよはやて！」

なのは、フェイト、シグナム、ウィータがはやての休暇宣言に意見する。

「そうですよ八神部隊長」

「私達も備えておかないと！」

「シググナム福隊長が倒される程強いんですよっ！？」

「今の私達じゃ……」

続いてスバル、ティアナ、エリオ、キャロが意見する。

「今回の事もあるし、これからの事もある、それに焦っても余計疲れてまうよ？」

「でも…」

「そうだね…はやてちゃんの言う通りだね」

「なのはさん！？」

「確かにはやてとなのはの言う通りだね」

「フェイトさん！？」

なのはとフェイトの意見にＦＷ陣は驚く。

よく見ると二人の後ろでシグナムとウ゛ィータも頷いていた。「ほんならみんな解散や、ゆっくり休んでな」

はやてがそう言うとみんな部屋を出て行く。

どうやらＦＷ陣はこうなったら休みを有意義に過ごす事に決めたようだ。

「なのは～」

「どうしたのフェイトちゃん？」

部屋をでて廊下を歩いている時に後ろからフェイトに声を掛けられる。

「今から外に夜御飯食べに行かない？時間は調度良いと思うんだけど」

そう言ってフェイトは目の前にモニターを出現させる。
そこには大きく

１９時と表示される。

それを見てなのはは、（もうそんな時間か）と思いながらも

「良いよ～、それじゃあ行こうフェイトちゃん」

誘いを受ける事にした。

時刻１９時……

【マスター時間です】

自らのデバイスの声に寝ていた黒は目を開け起き上がり、ふと窓に目を向ける。

その景色は先程見た物と違い完全に太陽は沈み代わりに月が出て、街は各地で明かりが点っていて、明かりの付けていない部屋をうっすらと照らしていた。

その景色を暫く見つめると黒は街に出る為の着替えを始めた。

１９時２０分

あれからなのはとフェイトは私服に着替えて夜食を取る為にミッドチルダに出ていた。

「久しぶりだよね一緒に外で食べるのは」

「そうだね、いつも食堂で食べちゃうしね」

なのはとフェイトは一緒によく食事を取るのだがほとんどが食堂である。

忙しい為に余り外に出られないのだ。

「今度はウ゛ィウ゛ィオも連れて来ようね」

「うん、きっとフェイトちゃんもいればウ゛ィウ゛ィオ喜ぶよ」

今回ウ゛ィウ゛ィオも連れて来る予定だったのだが、既に寝てしま

っていた為起こすのもあれだったので連れて来なかったのだ。
とたわいのない話しをしながら歩いていた二人だったが
突然後ろから声を掛けられる。
「ねぇねぇ君達可愛いね～俺達と一緒に遊ばない？」
振り向くとそこには3人の男が立っていた。
二人は俗に言うナンパに捕まったのだ。
「いえ、私達は用事があるので」
「いいじゃん一緒に来なよ、可愛いがってあげるからさ」
そう言って男達がなのは達の腕を強引に掴もうとした時。
ドカッ
「何だテメ」
一人の青年が不意に男達にぶつかったのだ。
「えっ？なっ何ですか？」
「何ですかじゃねーだろ？それが人にぶつかった時の態度か？」
「えっ道で立ち止まってた人が悪いんじゃ…」
「なんだと…喧嘩売ってんのか？コノヤロー」

「まあまぁ落ち着いて…

「あんま調子のんなよ！！」

とうとう男の一人がキレた。
男は青年に向かって殴り掛かろうとする。

「危ないっ！」

なのはとフェイトも青年の元に向かうが…
（間に合わない！！）

しかしなのは達の予想を超えたとんでもない事が起きた。

「うっうわっ！」

バコッ

「うがっ！？」

「えっ！？……」

なんと青年が目をつむりながら前に出した拳が男の顔面を直撃したのだ。

男はそのまま後ろに倒れ落ちる。

「あっ……」

当の青年はただ唖然とし、倒れた男を見ていた。
やられた男を見て他の男達は、倒れた男を連れていつの間にか消えていた。
その場に残るのはただ立ち尽くす青年と、なのは達だけだった。
なのは達はとりあえず助けて貰った青年にお礼を言う事にした。
「助けてくれてありがとう」
「あっ！いぇ助けたなんて」
ワイシャツとジーパン姿の青年は、なのは達に笑顔で話す。
「あの…貴方達のお名前は？」
「あっ！まだ言ってなかったね、私は高町なのは」
「私はフェイト・ハラオウンです」
青年の質問に答えるなのは達……
「君の名前は？」
なのはも青年の名前を聞き返す……
「僕は李瞬生（リーシェンシュン）です、李（リー）って呼んで下さい」
「うん、なら私はなのはって呼んでね？」

「私もフェイトで良いよ」

二人も李に自分達も呼びすてで良いと言うが、勿論李は良い物かと迷う。

「えっ！？でもいきなり呼びすては……」

「なのはで良いよ、ねフェイトちゃん？」

「うん、私もそっちのほうが良いかな」

そういう二人に負け仕方なく李はそう呼ぶ事にする。

「分かりました、なのはさん、フェイトさん」

「李君、さんが着いてる…」

「あっ！すいません…さんは着いても良いですか？そうじゃないと呼びづらくて」

「もー仕方ないな～、でもなるべくさんを付けないでね？」

「はい、なのはさん」

言った側からさんが付いている李になのはとフェイトがクスクス笑う。

それに李が「何ですか」と言った顔で？マークを頭上に出していた。

「あっそうだ、李も一緒に御飯食べない？今から私達食べに行くん

だけど」

「そうだね、李君も来ない？人数は多いほうが楽しいよ！」

いきなりフェイトとなのはが李を食事に誘う。

「僕は平気ですがお邪魔になるんじゃ…」

「大丈夫だよ、ねなのは？」

「うん、李君もおいでよ」

「お邪魔じゃなければご一緒させていただきます」

李はフェイトとなのはの誘いに乗る事にした。

「それじゃあ行こうか？」

こうして李を加えた三人は夜の街を歩きだした。

……

あれから歩き出して5分ぐらい経っただろうか、三人は今目的の店に着いた。

「ここですか？」

「うん、ここのスパゲティーが美味しいんだ」

「来た事あるんですか？ここ」

「前になのはと二人でね」

そう此処は過去になのはとフェイトで来た事があるイタリアン系の店だった。

三人は早速店に入ると、店員に席に連れてかれ、席に着いた。

店内は混んでいるか混んでないかと言うと、若干混んでいて店内の至る所から良い匂いが漂って来る。

その匂いに李も頬を綻ばせる。

なのはとフェイトは既に何を食べるか決まっているらしくメニューを李に渡して来た。

「どれも美味しそうですね」

そう言いながら暫くメニューを見つめ、決まったのかメニューから目を離し店員を呼ぶ。

「私達はミートスパゲティーを2つとサラダの盛り合わせ……李君

は？」

なのは達はベターなミートスパゲティーを頼み李は何を頼むのか聞いた。

しかし次の瞬間なのは達は驚愕する。

「ミートスパゲティー２つ、タラコスパゲティー２つサラダ３つ、ミネストローネ２つ、以上で」

李の尋常じゃない程の注文の量だ。

流石に店員もこれには驚く、注文を終えると店員は注文された品を繰り返し厨房に消えて行った。

「李君そんなに食べれるの！？」

「というよりお金平気！？」

なのはとフェイトはまだ驚いている用で開いた口が塞がらない。

「大丈夫ですよ、料金は問題ないですし、量はいつも通りですから」

その言葉を聞いてさらになのは達は驚く。

それからは店員が３人掛かりで品を持って来て、三人はそれぞれたわいのない話しをしながら食べた。

何故食べている時の事書かないか？

書いてたらきりがないからだよ！！

まぁ色々あって食べ終わった三人は会計を済まし店を出た。

「ごめんね、なんかお金出して貰って」

「いえいえ大丈夫ですよ、誘っていただいたお礼です」

「でも李はよくあんなお金あったね？」

会計はなのは達の分も李が出すと言いなのは達も断ったのだが、結局李が出したのだ。

ただ金額がそれなりにだったのでよくあんな大金があるなと思ったのだ。

「色々仕事を掛け持ちしてますから」

李が苦笑いしながらペコペコ頭を下げながら言う。

そうして三人で歩いていると別れ道に差し掛かる。

「それじゃあ僕はこっちなので」

そう言って李は左の道に行こうとする。

「あっ！ちょっと待って李君通信端末持ってる？」

「はい…一応ありますけど？」

左に行こうとするとなのはに止められた。

「なら李君の番号教えて？もう私達友達なんだから」

「そうだね、また一緒に御飯食べたいし…今度は私達がお金出すけど」

そう言ってなのはとフェイトはそれぞれ通信端末を取り出す。

「分かりました、友達ですからね」

そう言って李も通信端末を取り出しお互い番号を教えあった。

「それでは、また連絡しますんで」

「「うん、またね～」」

そう言って李は左、なのは達は右をそれぞれ進んだ。

……

李は自宅に向かって歩く

ただ彼の目は先程までの明かりの点った目でなく、深い黒色の鋭い目つきになっていた。

それはまさしく黒だった。

なのは達は知らない…

彼李瞬生が自分達の敵である黒の死神だと…

今はまだ知るよしも無い。

……

あれからなのはとフェイトは六課に到着し、連れてかれなかった事に怒っていたウ゛ィウ゛ィオをなだめ

それぞれ寝間着に着替えて就寝する所だった。

ちなみにフェイトとなのはは同じ部屋で暮らして居る為に寝るのも一緒だ。

既に部屋は明かりが消されており、隣ではウ゛ィウ゛ィオとフェイトが既に寝ていた。

なのはも寝る為にベットに横になる。

そうして目を閉じて、意識を手放した。

なのはが眠りに着いた頃

李こと黒は自宅に到着し、今まさに眠りに着こうとしていた。

（あれが管理局のエースオブエースと心優しき閃光……）

（彼女達に戦いは似合わない…）

（今日は楽しかったな…）

（いや…契約者に感情は無い…）

黒は自分には感情など無かったなと思いながら黒は意識を手放した。

死神は夢を見れない…

見る事も許されない……

故に死神は今日も暗闇にただ一人……

無に帰る

第5章・李瞬生（後書き）

どうでしたか？

少しはマシになりましたでしょうか？

とりあえずこれからも頑張って行きます！

また新たに作品を作成しようか考えています！

その時はよろしくお願いします

【予告】

「はやてちゃんに告げられた突然の休暇」

「みんなそれぞれの過ごし方をして疲れを癒す時」

「街でまた彼と出会う」

第６章・六課の休日

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅＳ～漆黒の黒～にテイクオフ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9983i/

魔法少女リリカルなのはSts〜漆黒の黒〜

2010年10月9日22時21分発行